

書評と紹介

G. エスピン-アンデルセン, マリーノ・レジーニ編
伍賀一道, 北明美, 白井邦彦, 澤田幹, 川口章訳

『労働市場の規制緩和を 検証する

——欧州8カ国の現状と課題』

評者：下平 好博

いま世界中で規制緩和の嵐が吹き荒れている。とりわけ、労働市場の規制緩和は、グローバル化が進み国際競争圧力が高まる中で、雇用を維持するためには避けて通れない選択であるとされてきた。しかし、2002年の夏に400万人の失業者を抱え、それを半減させるためにとった労働市場改革（いわゆるハルトツ委員会改革）がわずか数年内に500万人を超える失業者を生み出してしまったドイツの例をみれば明らかのように、規制緩和が直ちに雇用を生み出すという保証はない。

これと同じことはわが国についてもいえる。小泉政権の下で不必要とも思えるほどの規制緩和策があの手この手と打ち出されてきたが、それらの政策は地位の不安定な非正規雇用者を増やしただけで、逆に正規雇用者の数は減る一方である。そして、そのことが国民の間に大きな雇用不安を生んでいることは周知のとおりである。

本書は、このような労働市場の規制緩和と雇用の量および質との関係を、欧州8カ国のケーススタディを通して明らかにしようとするものである。以下では、本書の内容を簡単に紹介し

たうえて、思いつくままに感想を述べておきたい。

まず、「ヨーロッパにおける労働市場の改編」と題する第一部において、3人の論者がこの問題をめぐる理論的整理を行っている。第1章においてマリーノ・レジーニは、労働の柔軟性を確保する方法として、①入職と離職における数量的フレキシビリティ、②仕事の配置と労働異動にかかわる職務上のフレキシビリティ、③賃金の水準と構造に関する賃金フレキシビリティ、④労働時間にかかわる時間的フレキシビリティの4つがあることを示し、これらは相互にトレード・オフの関係にあること、したがって労働市場の柔軟性を追求しようとする政策が逆に「隠された硬直性」を生み出す危険性があることを明らかにしている。

また第2章では、マニュエラ・ザメック・ロドビーチが、労働市場の規制レジームに①数量的フレキシビリティを最優先するアングロサクソン諸国の自由主義レジーム、②労働移動支援を重視する北欧の社会民主主義レジーム、③中核的労働者の雇用保障を重視するヨーロッパ大陸や南欧の保守主義レジームという3つのタイプがあり、短期間でヨーロッパのこのように入り組んだシステムを変えることは難しいとしている。

続く第3章と第4章では、エスピン-アンデルセンが、労働市場の規制緩和の根拠とされる次の3つの命題、すなわち、①<寛大な社会保障が失業を生む>、②<高い最低賃金と平等主義的な賃金構造が失業をつくる>、③<雇用保護が失業を生む>をそれぞれ、先行調査研究をサーベイすることや、またマクロ・データを使って自ら計量分析を行うことで検証している。

それによれば、これらの命題はいずれもヨーロッパにおいては当てはまらず、むしろヨーロッパの失業問題を大きく左右しているのは、①労働供給圧力と②サービス経済化のパターンであるという。

第二部では、イギリス、デンマーク、スウェーデン、オランダ、ドイツ、フランス、イタリア、スペインの8カ国が順番に取り上げられ、①それぞれの国内において、規制緩和をめぐるどのような議論があるのか、②また、具体的にどのような政策が採られているのか、③そして、それらの政策はそれぞれの国の労働市場にいかなる影響を及ぼしたのが考察されている。

まず、イギリスについては、1990年代の後半になって雇用情勢が大きく改善したことから、労働市場の規制緩和政策がはじまった1980年代に遡ってそのような政策が功を奏したとする解釈が一般的になりつつある。だが、シモン・デーキンとハンナ・リードはそうした解釈がまったく根拠がないものであるとする。すなわち、この20年間に、①失業の影響はますます世帯員がすべて無業者であるような世帯に集中し、②また「失業」と「低賃金・非正規・短期就労」との境界がますます曖昧になり、③さらに上昇的な社会移動が制限されて、低賃金の産業や職種で働く者はそこに滞留する可能性が強まったとしている。

第6章では、1960年代から積極的労働市場政策を実践してきたスウェーデンと、90年代までそれが完全に欠落していたデンマークとが取り上げられ、それぞれの雇用パフォーマンスが比較されている。ここで興味深いのは、同じ北欧諸国でも積極的労働市場政策において大きく遅れをとったデンマークがむしろ、90年代に二度の労働市場改革を断行し、失業率を引き下げること成功したことである。

続く第7章では、この「デンマーク・モデル」と並ぶ、90年代のもうひとつの成功例とされる「オランダ・モデル」が取り上げられている。ケーズ・ホテルは過去15年間にオランダ経済が経験したものは、「賃金抑制」と「パート労働者の増加」であったとし、それらがオランダの雇用の拡大に貢献したとみる。しかし、そのような成功の影に、大量の非活動人口が存在することを指摘することも忘れていない。

第8章では、東西ドイツ統一後、深刻な失業問題に直面することになったドイツが取り上げられている。手厚い社会保障給付や法定最低賃金によって留保賃金が高いなど、ドイツの労働市場は規制が強いことで知られているが、そのことが直ちに雇用に対してマイナスの効果をもつわけではない。またドイツでは、市場メカニズムに変わりうる機能的に等価な諸制度が存在するため、実際には規制緩和政策もそれほど進んでいないとされる。

一方、フランスはここでは「規制緩和とは無縁な国」として分類されている。すなわち、これまで失業との関連で労働市場の硬直性が問題とされたことはなく、また労働市場への国家介入に疑問がなげかけられることもなかった。そして、時短や労働時間の柔軟化を通じて雇用の拡大を図ってきたが、そのような試みは失業問題を解決するうえであまり成功していないという。またイタリアは、フランスと同様に、厳格に規制された労働市場をもつ国であるが、ヤミ経済の存在でそれが相殺される構造をもっており、労働市場の構造改革の実験は90年代の後半になってようやくはじまったばかりである。さらに、スペインは、80年代から労働市場の規制緩和を進めるなかで、常用労働者と臨時労働者からなる二重の労働市場が出現したが、景気のバッファーとなる臨時労働者を家族が吸収してきたことにその特徴があるとされている。

そして以上を総括して本書は、①ヨーロッパとはけっして同質ではなく、＜アメリカ対ヨーロッパ＞という単純な図式によって政策論議することは不毛であること、②労働市場への規制は失業の水準に影響を与えるものではなく、むしろその構造に影響を及ぼすこと、③したがって、労働市場の規制緩和一辺倒というのは、より大きなフレキシビリティの確保からみてもけっして有益でない、と結論づける。

本書を通読して感じたことを、率直に述べておきたい。

(1) まず、ヨーロッパの国々を対象としているにもかかわらず、第2章のロドビーチ論文を除くとEUレベルでの動きに言及している論文が少ないことが気にかかる。EU加盟国の国内での立法の多くがこんにちEU発であることを考えると、本書に収録された論文はこの点でバランスを欠いているように思える。とくに、1997年のルクセンブルグ雇用サミット以降、EU加盟国には雇用政策において共通目標が設定され、国民国家レベルでのその自由度が失われていることを考えると、本書の著者たちはかなり楽観的すぎるという印象をもった。

(2) また、雇用・失業を論じる際にマクロ経済政策への言及がほとんどないことは、画竜点睛を欠いているといえよう。たとえば、いかなる優れた労働市場政策といえども、マクロ経済政策による支援がない場合、その効力は大きく削がれるとみるのが一般的である。とくにEU加盟国のなかでユーロを導入した国においては現在、金融政策はもちろんのこと、財政政策についてもその自由度は小さい。したがって、これまでは＜規制緩和とは無縁な国＞が、少なくともユーロ採用後は、マクロ経済政策によっ

て雇用を拡大することができず、ともすれば労働市場の規制緩和と政策に頼らざるを得ない状況が出現しているといえよう。本書の原題である、＜いまなぜ労働市場の規制緩和か？＞という問いに対する答えも、おそらくはその辺にあるのではないかと思われる。

(3) さらに、本書は論文集であるため、全体として大きなストーリーに欠けるきらいがある。そうした中でひとり、＜将来の雇用を左右するのは製造業ではなく、サービスである＞という自説を展開しているのは、エスピン-アンデルセンである。だが、グローバル化の圧力の前に、ヨーロッパでも、セルフサービス化や公共部門主導のサービス化の道を探ることは次第に難しくなっており、雇用を確保しようとするばどうしても民間主導のサービス化に傾斜しがちである。その場合、雇用の質を担保するためにわれわれは再工業化に活路を見出すことも必要となるかもしれない。だが、本書がそのような可能性をどこまで視野に入れているのか、正直に言って疑問に思わざるを得なかった。

ただし本書は、一国の社会労働法に限ってもわずか10年のうちに百を超える法律がつけられては消えていく時代に、ヨーロッパの主要8カ国について、過去20年間にわたる社会労働分野での重要な動きを丹念に追跡しており、それだけでも大きな価値をもつものといえよう。是非、一読することをお薦めしたい。

(G. エスピン-アンデルセン、マリーノ・レジエニ編／伍賀一道、北明美、白井邦彦、澤田幹、川口章訳『労働市場の規制緩和を検証する—欧州8カ国の現状と課題』青木書店、2004年2月、xv+418頁、定価4800円+税)

(しもだいら・よしひろ 明星大学人文学部教授)